

2017(平成 29) 年度 授業改善アンケート実施報告

<全体の実施状況>

<科目群・科目種別の現状と課題> ※

- ・基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて
木田 直人（基礎ゼミナール部会長、都市教養学部人文・社会系 准教授）
- ・情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠA 授業改善アンケート等について
永井 正洋（情報教育検討部会長、大学教育センター 教授）
- ・実践英語の授業改善アンケートについて
高岸 冬詩（英語教育分科会座長、都市教養学部人文・社会系 教授）
- ・未修言語科目の授業改善アンケートについて
古屋 裕一（未修言語科目部会長、都市教養学部人文・社会系 准教授）
- ・理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて ―その現状、経年変化、今後の課題―
森 弘之（理工学系 FD 委員会委員長、都市教養学部理工学系 教授）
- ・教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて
野口 昌良（教養・基盤科目群検討部会長、都市教養学部経営学系 教授）

※2017（平成 29）年度前期の結果に基づく報告。

ただし、未修言語科目は後期にアンケートを実施しているため、2016（平成 28）年度後期の結果に基づく報告。

授業改善アンケート全体の実施状況

1 調査概要

(1) 実施時期

前期：平成 29 年 7 月 10 日～7 月 24 日 後期：平成 30 年 1 月 5 日～1 月 22 日

(2) 実施対象科目

| | |
|----|---|
| 前期 | <ul style="list-style-type: none">○ 基礎科目群<ul style="list-style-type: none">・ 基礎ゼミナール・ 情報科目（情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠA）・ 実践英語科目（実践英語Ⅰa）・ 理系共通基礎科目・ キャリア教育科目（現場体験型インターンシップは除く）・ 保健体育科目○ 教養科目群○ 基盤科目群 |
| 後期 | <ul style="list-style-type: none">○ 基礎科目群<ul style="list-style-type: none">・ 情報科目（情報リテラシー実践ⅡA・ⅡB・ⅡC）・ 実践英語科目（実践英語Ⅱb）・ 未修言語科目（ドイツ語Ⅰ・フランス語Ⅰ・中国語Ⅰ・朝鮮語Ⅰ）・ 理系共通基礎科目・ キャリア教育科目・ 保健体育科目○ 教養科目群○ 基盤科目群 |

(3) 質問項目

問 1：この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問 2：授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問 3：授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？

（予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。）

問 4：この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）。

問 5：この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください。

問 6：この授業について改善してほしい点を、可能ならば具体的な改善案も含めて書いてください。

問 7：その他、この授業やカリキュラム全体および授業設備等について、自由に意見を書いてください。

問 8～問 10：＜ 科目群・科目種別ごとの質問 ＞

問 11・問 12：＜ 教員ごとの質問 ＞

2 実施状況（前期）

(1) 全体

対象科目数：368 科目

実施科目数：326 科目

実施率：88.6%

履修登録者数：20,595 名

回答者数：13,580 名

回収率：65.9%

（対象科目における履修登録者数）

(2) 科目群・科目種別

次頁以降の「現状と課題」を参照

基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

基礎ゼミナール部会長
都市教養学部人文・社会系准教授
木田 直人

【はじめに】

基礎ゼミナール（以下、「基礎ゼミ」と略す）の目的に掲げられているのは以下の三点である。

- (1) 能動的な学習姿勢を学ぶ：自ら学び、考え、行動する
- (2) 基本的な技術・能力の習得：調べる、まとめる、発表する
- (3) 豊かな人間関係の形成：グループ討論、共同調査

この目標は基礎ゼミに限られたものではなく、学問通有の目的であろうと思われる。基礎ゼミの受講生は、ほとんどが大学一年生であり、するとある意味、生まれてはじめて本格的な学問的態度が要請される経験をするのだろう。では、高校生までの勉強との最大の差異は何だろうか。上の(1)～(3)にその回答の一端は示されているのかもしれない。だがあえて切り口を変えて返答するなら、「問う勇氣」ではないだろうか。「勉強と違って学問は楽しい」という月並みな言い草は、問う勇氣を持たない者には空無であろう。学問は知性だけでなく勇氣をも巻き込んだ全人的営みであること、これを痛感することが基礎ゼミの目標であり、これに成功するならおそらく学問は楽しい。失敗するならおそらく苦痛である。

翻り、教員側には何が要請されるのだろうか。それはただ勉強せよというメッセージを送ることではなく、勇氣を持てと檄を飛ばすことに違いない。形式上、基礎ゼミは数ある科目の一科目であるが、実質は問う勇氣を育てること、つまり学問へと「誘う」営為ではないだろうか。学生には勇氣が要請され、教員にはこれを鼓舞することが要請される。

【アンケート結果に寄せて】

アンケート結果の詳細についてはグラフを参照していただきたいが、上に述べた事柄と関係する点に絞って記しておきたい。

問2「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた」という質問にたいし、「そう思う」と「や

やそう思う」の合計が実に82%を占めていること。この高い割合の要因として、学生たちの知的関心の高さがあることはまちがいないが、教員側の授業運営の丁寧な工夫が大きいのではないかと考えられる。というのは、学生はほぼ前提知識を持ち合わせていないことに加え、教授内容は深い深い専門内容だからである。予想であるが、恐らく教員は普通の授業に比べ、授業準備に苦勞しているのではないだろうか（余談だが、基礎ゼミの担当はもうこりごりだという先生がいることを私は知っている）。ちょっとした社会人向け講座を毎週開講するのに似たことが要請されているのだから。「誘う」努力、これは教員にとって試練であると同時に、専門知を社会に還元する絶好の機会でもあるだろう。

問3「授業時間以外で一週間にどれくらい、この授業に関連した学習をしましたか」について、「1時間程度」以上は42.8%となっており、実践英語の47.8%、理系共通45.5%に次ぐ高い数字が出ている。ゼミであるからには、周到的発表準備やレポートが要請されるので、当然と言えば当然であり、理想的とも言える。学生は学問の難しさと楽しさを知ったであろう。ところが一方で、「ほぼ0時間」という返答は24.9%であり、かなりの数の学生が、授業時間以外に当該科目を学習しなかったという結果が出ている。これをどう考えるかであるが、私は必ずしも否定的に捉えるべきではないと思う。というのは、冒頭の第三目標で触れられた「グループ討論」などが典型的なように、授業中に大きな気づきを提供しうるのであるなら、必ずしも授業外に負荷をかけるべきではないし、本来授業とはそうした刺激に満ちたものであるべきだからである。0時間を「改善」しようとして授業外にむやみに負荷をかけることを目的にするなら、「誘い」の目的を見失った本末転倒になりかねない。各教員の各授業の特性に応じて授業外学習時間は考察されるべきものであり、一律に評価するのは危険であろう。

問8「この授業を通じて、問題発見と、その解決に

向けた自発的な取り組み姿勢の重要性を認識した」につき、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせ、80.5%となっている。この自発性の重要性の自覚こそ、基礎ゼミ開講の目的の最たるものであるから、喜ばしい結果と言える。担当の先生方の授業の工夫の誇るべき成果である。ただ、手放しで喜んでいるわけにもいかない。学生たちはやがて専門科目へと進み、基礎ゼミで味わったはずのあの学問の喜びが、なぜ湧かぬのかと自問するかもしれない。自分の自発性は錯覚だったのかと訝るかもしれない。その可能性は十分にある。なぜなら、実際に錯覚の可能性が高いからである。問4の「この授業で修得・向上できた知識や能力」として、「能動的学習姿勢」を挙げる学生がわずかに28.3%しかいないことは、その自覚が本人たちにうすうす存在することを物語っている。基礎ゼミは「自発性の重要性の自覚」のみ促したのであって、自発性そのものの獲得に行きついていない、あるいはいまだ未熟であると認識すべきだろう。それもそのはず、学問はそんなに甘くないからである。それは勇気が単純に

手に入れられる知的内容物ではないことに基づいている。基礎ゼミ段階での勇気は、教員が苦勞して引き出した(educate)ものであって、やがては毎週の変り映えのしない「基礎ではないゼミ」に直面したとき「問う勇気」を自ら奮い立たせなければならないだろう。やはり基礎ゼミは、ゼミの擬似体験にすぎない。自らの足で立つまでは、教員は学生の背中を押しながら苦勞しなければならない。その意味で、基礎ゼミは、やはり基礎ゼミにすぎず、ゼミというよりはむしろ講義なのかもしれない。

【おわりに】

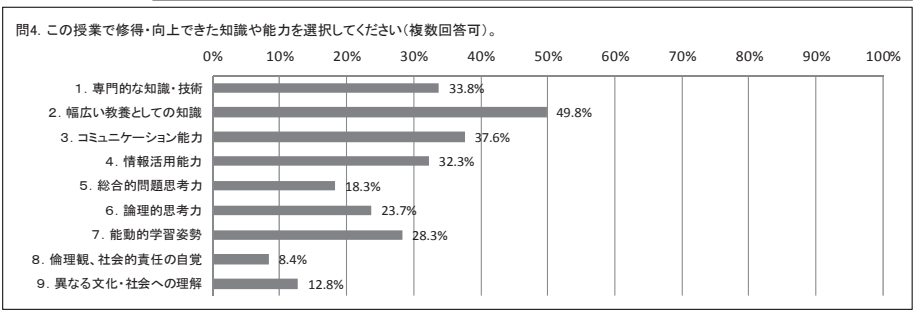
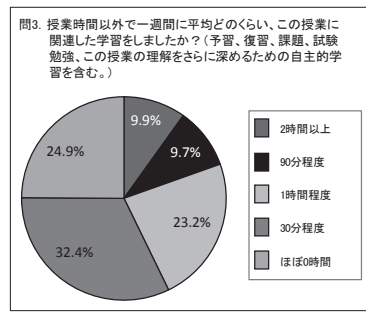
学生側の能動性・自発性、教員側の誘いという点に絞って考察を進めてきたが、質問項目全体を見ざるなら、おおむね学生の満足度は高いように思われる。「勇気を持って」と檄を飛ばしてくださった先生方、学問への墾道を開拓してくださった基礎ゼミ担当の先生方に感謝申し上げたい。

＜実施期間＞ 平成29年7月10日(月)～平成29年7月24日(月)
 ＜履修登録者数＞ 1,653人 ＜回答者数＞ 1,353人 ＜回収率＞ 81.9%
 ＜授業科目数＞ 78クラス ＜実施科目数＞ 69クラス ＜実施率＞ 88.5%
 ＜アンケート実施科目における回収率＞ 93.0%(回答者数/実施科目の履修人数合計)

| 設問文 | 平均 | 標準偏差 | 0% | 20% | 40% | 60% | 80% | 100% |
|---|------|------|----|-------|-------|-------|------|------|
| 問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。 | 4.04 | 0.97 | | 38.3% | 35.7% | 19.3% | 4.8% | 1.8% |
| 問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。 | 4.11 | 0.83 | | 34.2% | 47.8% | 14.1% | 2.5% | 1.4% |
| 問8 この授業を通じて、問題発見と、その解決に向けた自発的な取り組み姿勢の重要性を認識した。 | 4.17 | 0.78 | | 36.6% | 47.5% | 13.3% | 1.7% | 0.9% |
| 問9 この授業を通じて、議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた。 | 4.09 | 0.76 | | 29.6% | 52.7% | 15.0% | 1.9% | 0.8% |
| 問10 グループでの調査や討論を通じて、他所属の学生とも良好な人間関係を形成することができた。 | 4.05 | 0.93 | | 35.0% | 43.8% | 15.2% | 3.6% | 2.4% |

データ数 = 1,353

■ 5.そう思う ■ 4.ややそう思う ■ 3.どちらでもない ■ 2.あまりそう思わない ■ 1.そう思わない



情報リテラシー実践 I・IA 授業改善アンケート等について

情報教育検討部会長
大学教育センター教授
永井 正洋

【はじめに】

情報リテラシー実践 I は、基礎的な情報活用の実践力を育成する科目として設置されている。また、より専門性を高めた授業として情報リテラシー実践 IA（表計算ソフトを利用した統計処理）、情報リテラシー実践 IB（表計算ソフトを利用した基礎的プログラミング）という科目も設定している。現在は、これら 3 科目のうち 1 科目を選択必修として、学部・系・コースが指定しているが、実際には I と IA だけの開講となっている。

本稿では、2017 年度の前期末に行った FD 委員会実施の情報リテラシー実践 I・IA に関する授業改善アンケートの結果等について報告する。

【授業評価の方法】

まず、授業改善アンケートの質問項目だが、共通項目が問 1～7、個別質問項目が問 8～10 となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。実施状況については、後掲の図中に示した。

【結果と考察】

次ページの図は、FD 委員会が実施した授業改善アンケートの結果である。問 8（満足度）からは、69.5% の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問 9（難易度）に関しては、現在の学習内容を 20.4% の学生が容易だと思うのに対して、48.7% の学生が難しいと思っており、例えば、情報リテラシー実践 I の学習内容を現在より専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問 3（授業外学習時間）からは、授業外での学習について、30 分未満の学生が 70.0%（昨年度 72.2%）いることが示されている。ここで一昨年度が 69.7% であったことを勘案すると、反転学習などの取組の成果ともいえるが若干持ち直していることが分かる。最後に、問 4（知識・能力獲得）を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できた

と回答していることが分かるが、情報倫理の育成に関して要請の多いことを勘案すると、「8. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目を今後、伸ばしていく必要があると考えられる（H26=10.8 → H27=8.7 → H28=8.9 → H29=7.9 単位 %）。

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果（図は不掲載）に関して報告する。4 つの質問項目からは、学生の 74.4% が、情報リテラシーが身に付いたと回答すると共に、71.6% が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、66.6% の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に 76.6% が満足していることが分かった。

以上、まとめると、おおむね学生は意欲的に授業に取り組み、教員の説明や対応も評価すると共に、情報リテラシーが身に付いたと認識している。さらに、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。ただ、若干、本年度は項目の数値が昨年度と比べ高くない状況が散見されるので、当該の項目については注視していきたい。また、他に留意すべき点としては、例年と同様に、授業内容をどちらかというとなりに難しいと感じている学生が多くいることと、授業外での学習時間が不足していることなどがあげられる。

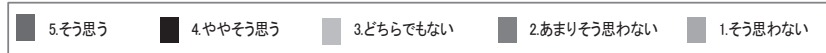
【eラーニングについて】

現在、全学で利用している eラーニングシステム、kibaco（Sakai ベース）のリースが来年度で終わることに併せて、次期システムの検討が情報メディア教育支援部会で行われている。本科目でも先生方から要望のあるビデオ掲載などについて、利便性と安定運用が実現できるよう検討が進められている。

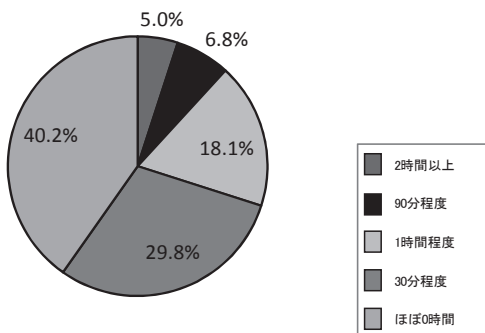
<実施期間> 平成29年7月10日(月)～平成29年7月24日(月)
 <履修登録者数> 1,651人 <回答者数> 1,447人 <回収率> 87.6%
 <授業科目数> 37クラス <実施科目数> 37クラス <実施率> 100.0%
 <アンケート実施科目における回収率> 87.6%(回答者数/実施科目の履修人数合計)

| 設問文 | 平均 | 標準偏差 | 0% | 20% | 40% | 60% | 80% | 100% |
|---------------------------------------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| 問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。 | 3.54 | 1.09 | 23.2% | 25.4% | 39.6% | 5.7% | | |
| 問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。 | 3.77 | 1.01 | 23.1% | 46.3% | 19.3% | 7.5% | 6.1% | |
| 問8 この授業を受講して満足した。 | 3.88 | 1.05 | 32.4% | 37.1% | 20.8% | 5.8% | 3.8% | |
| 問9 授業全体を振り返って、この授業は難しかった。 | 3.39 | 1.11 | 16.8% | 31.9% | 30.9% | 13.9% | 6.5% | |
| 問10 チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応した。 | 4.22 | 1.01 | 52.7% | 25.5% | 16.0% | 3.2% | 2.5% | |

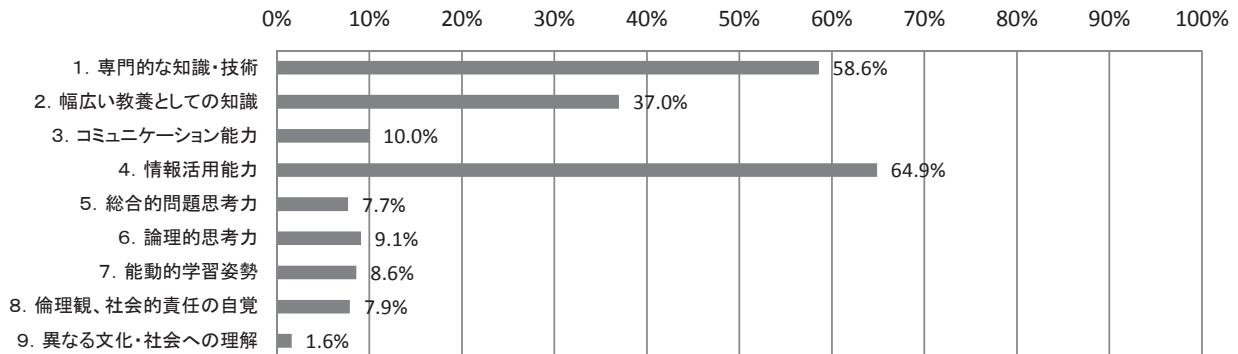
データ数=1,447



問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。)



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



実践英語の授業改善アンケートについて

英語教育分科会座長
都市教養学部人文・社会系教授
高岸 冬詩

【はじめに】

本学の英語教育は、2013年度に新たなカリキュラムを導入してから、今年度で5年目となった。入学時にTOEICを利用したクラス編成テストによってレベル分けを行い、統一教科書を使用するBレベルに加え、Aレベル（特に英語運用能力の高い学生）、Cレベル（初学者を含め、特段の配慮を要すると思われる学生）を設定し、能力に応じた教材と教育方法によるきめ細かい指導を目指している。Aレベルは約8名、Cレベルは約10名のクラスサイズで運営し、大半の学生の属するBレベルは約20名を基準として、少人数クラスの英語教育を実践している。

【個別質問事項について】

統一教科書について Bレベルの統一教科書として用いたInside Reading 4は、本学の1年生の学力にふさわしい英語読解力と語彙力を養成し、論理的な思考法を身につけることを目指して採用したテキストである。生物学、心理学、表象文化、経済学など、学際的に幅広い分野におよぶ記事を提供し、文系・理系を問わず学生全般の知的好奇心を満足させ、専門課程への学習意欲を掻き立てる上でも役立つ内容だ。また、各課に学術的語彙リストがついており、やや難しい語彙を習得することで、英語読解のスキルアップが期待できるようになっている。

アンケートの問8は、この教科書の難易度を尋ねている。「易しい」1.9% (2.7%) 「やや易しい」4.7% (8.5%) 「ちょうどよい」58.8% (69.1%) 「やや難しい」28.4% (16.6%) 「難しい」6.2% (3.1%) であった（カッコ内は昨年度の数値）。約6割の学生が難易度を適正であると考えており、この割合は昨年度の約7割よりは低くなっているが、「やや難しい」を含めた割合では87.2%で、昨年度の85.7%を上回る。「やや難しい」と感じる程度の教科書の方が、学生にとっても勉強しがいがあると推測することができ、その意味でこの結果は、今年度の統一教科書の適切性を示しているものと考えられるだろう。

学生の関心 問9「授業の中で、一番関心を持って取り

組むことができたのは何か」の質問に対しては、「内容理解」39.5% 「英文和訳」28.8% 「語彙の学習」14.5% 「構文理解」11.8% 「発音練習」5.4% という回答分布であった。昨年度はそれぞれ43.9%、26.0%、15.1%、11.1%、3.9%であったので、特異な変化は見られず、おおむね例年どおりの割合であると言える。**今後の学習との関わり** 問10「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか」の質問には、「そう思う」が24.9% 「ややそう思う」が45.8%、両者の合計は70.7%となった。この数字は、一昨年が64.3%、昨年が69.1%と上昇傾向にあり、昨年よりさらに1.6%の改善が見られた。平均値を見ても、過去最高であった昨年度の3.78を上回る3.82を記録しており、今後の英語学習への継続性を学生がしっかり意識していることを反映した、好ましい結果と受けとめている。

【共通の質問事項について】

シラバスについて 問1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だったか」に対する回答結果は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて47.0%であった。昨年の49.2%より2.2%下がっているが、ほぼ例年通りの評価と言える。「どちらでもない」が最も多い40.5%を占めているのは、実践英語Ⅰが必修科目であり、授業の選択とは関わりがないところからくるものと考えられる。

授業の理解度 授業の理解度を尋ねた問2に対する回答は、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて78.1%となった。この数字は、一昨年度の73.0%、昨年度の76.6%を上回る結果となり、改善傾向が続いている。理解に問題を感じた学生の割合が、昨年度の7.9%から7.2%に減っているのもよい兆候である。この数字をさらに減らしていけるよう、各授業で工夫を続けていくことが望ましい。

学習時間 問3は一週間の授業外学習時間の平均を尋ねる質問で、「2時間以上」8.0% 「90分以上」12.6% 「1時間程度」27.2% 「30分程度」36.4% 「ほぼ0時間」15.9%という結果であった。「1時間程度」以上の

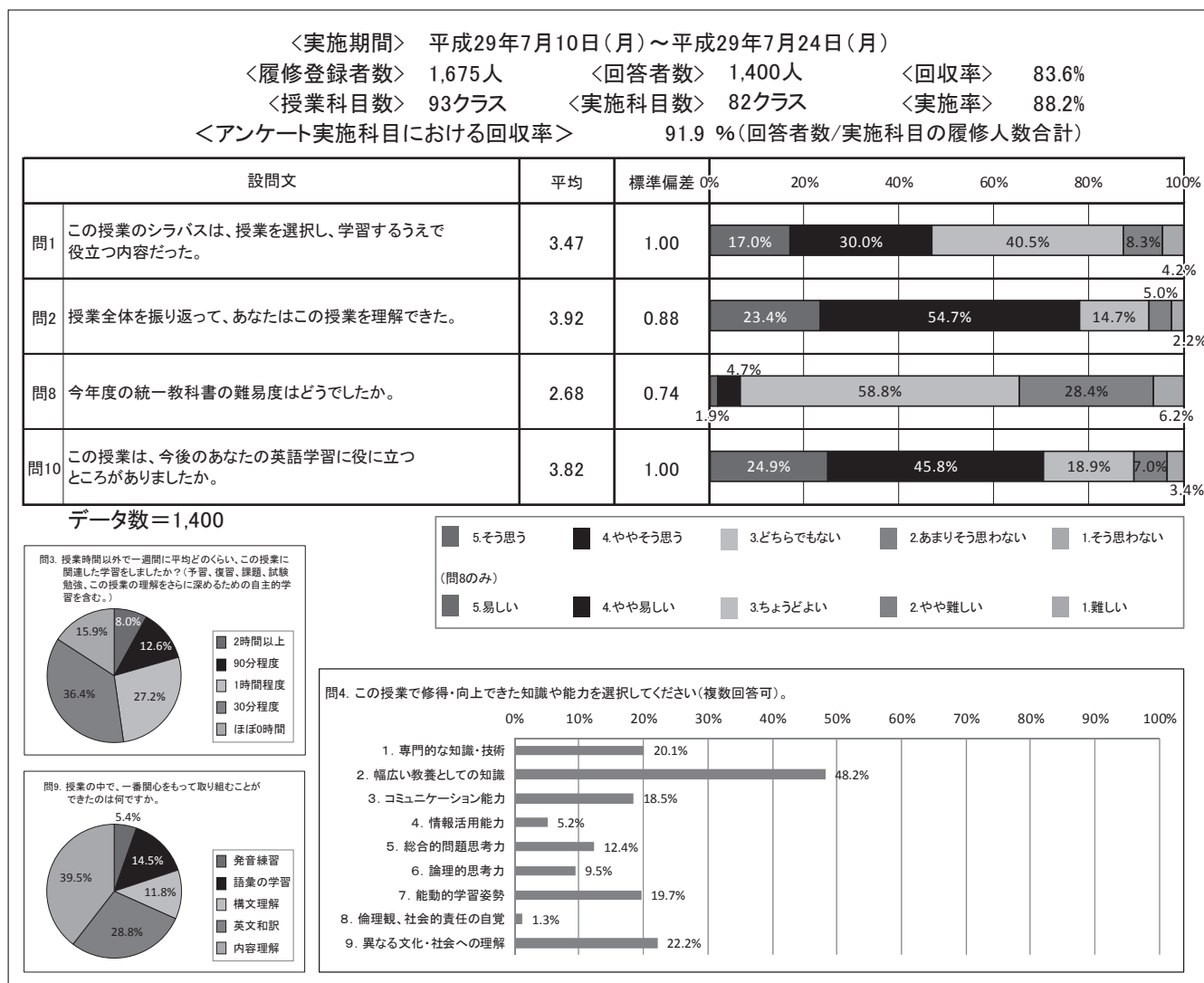
割合を合計すると47.8%で、2013年から今年度までの経年変化を見ると、年度順に47.8%、50.0%、42.1%、48.6%、47.8%となっており、50%以下の数値で推移している。裏を返せば、「30分程度」と「ほぼ0時間」の合計が毎年5割以上を占めているわけで、これは好ましくない傾向と言えるだろう。「ほぼ0時間」の数値が昨年の16.1%から0.2ポイント減り、過去8年間では2014年度の15.7%に次いで2番目に少なかったのは救いであるが、予習・復習や自主的学習が必須であるはずの英語においては、この数値をさらにゼロに近づけるべく、授業外学習の重要性を学生に説いていく必要がある。

授業で得られるもの 問4は「この授業で修得・向上できた知識や能力」を複数回答可で選択させている。「幅広い教養としての知識」48.2% (51.4%) 「異なる文化・社会への理解」22.2% (34.9%) 「専門的な技術・知識」20.1% (18.7%) 「能動的学習姿勢」19.7% (18.2%) 「コミュニケーション能力」18.5% (20.0%) (カッコ内は昨年度の数値) という結果は、ほぼ例年どおりであり、実践英語のシラバスに掲げた「言語の背

景にある文化・歴史・倫理などを深く理解し、知的視野を広げる」という目標が一定程度達成されているものと評価できるだろう。

【今後の課題と展望】

新カリキュラム実施後5回目となる授業改善アンケートの結果は、全般的に着実な改善傾向を示している。一方で、学生の自由記述の中には、各授業に対する評価を示す意見とともに、少数ながら不満の声も散見される。授業毎のアンケート結果は各教員にフィードバックされているので、すべての学生の意見に真摯に向き合うことが大切であろう。アンケート結果を踏まえ次年度の授業の改善を目指す教員一人一人の努力が、実を結んできている手応えは十分に感じられる。統一教科書の特性を活かしつつ、クラスの習熟度に合わせて様々な工夫を凝らしながら授業を運営し、学生の自主的な授業外学習を促していくことが、さらなる英語力アップにつながるものと期待し、今後の実践英語授業の一層の改善を目指していきたい。



未修言語科目の授業改善アンケートについて

未修言語科目部会長
都市教養学部人文・社会系准教授
古屋 裕一

【未修言語科目の目的・目標】

本学では、大学入学後に初めて学ぶ言語科目のことを「未修言語科目」と呼んでおり、「第二群」（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語）、「第三群」（ロシア語・スペイン語・イタリア語・ギリシャ語・ラテン語）の二つの科目群から構成される。本学では多くの学科が第二群の科目を必修科目、あるいは推奨科目に指定している。未修言語は人文・社会系の担当教室のコーディネーターと、未修言語科目部会場の場を中心とした各言語担当教室の情報交換により、授業の健全な運営と不断の改革が行われてきた。授業（特に初級）の設定する目標は、大学入学後に初めて学ぶ外国語ということを鑑みて以下の二点に集約されよう。

- ①発音、文法、基本語彙など未修言語の基礎の習得。
- ②異文化に触れ国際的な視野を育むきっかけをもつ。

また近年の傾向として、本学では外国語の資格取得を目指す学生が増加していること、本学と世界各地の大学との国際交流提携が推進されていることが挙げられる。さらに2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を間近にひかえた今日、英語以外の多様な言語学習と異文化理解の促進のために、未修言語教育はますます重要となりつつある。

【個別の質問事項】

問8は、選択した言語の種別を問う設問である。各項目がどの言語科目に対する回答なのかを把握し、より正確な実態調査を行うために設けられている。ここ数年ほど、中国語とドイツ語が各30%程度、フランス語が20%程度、朝鮮語が10%程度の割合で安定していたが、本年度は、中国語が41.0%、ドイツ語が33.6%、フランス語が18.3%、朝鮮語が7.1%と、中国語の割合が高い。その分フランス語が割を食っている感じである。アジアにおける中国の成長、領海問題にみられるような大国意識に対する危機感の現れと読むこともできるが、今後の推移を見守りたい。

問9と10は2015年度のアンケートから新しく設定された設問で、先に述べた未修言語教育の二つの目標に対応するものである。この質問は、学生の未修言語に対する満足度や要求、異文化理解の程度を反映するもので、授業改善に大きな役割を果たしてくれる。

問9は、授業で外国語を学ぶなかで最も有益だった学習内容を問う設問である。受講生は話す・聞く・読む・書くの四技能を総合的に習得していく。どの学習内容に関心をもったのかを理解することで、学生の学習傾向を把握することができる。

結果は、「文法説明」39.4%、「発声練習」30.9%、「語彙の学習」15.7%、「外国語の作文」5.1%、「和訳」8.9%となっており、これは前年度の数値と驚くほど近似している。「文法説明」と「発声練習」が大きなポイントを示すのは、外国語の初級者の感覚から言って、よく理解できることであるが、「語彙の学習」「和訳」のポイントが低いのは、授業外学習に時間を割かない、語彙が習得できないから「和訳」が面倒に感じられる、と言う悪い傾向が現れているのではないかと。辞書をよく引き、単語帳を作り、しっかりと暗記しながら訳す、という外国語を読むための基本姿勢をもっと徹底的に学生に言って聞かせる必要があるだろう。「外国語の作文」は作文に特化した授業がそうあるわけではないので、このくらいのポイントにとどまらざるを得ないだろう。

問10は、未修言語の授業が異文化への興味・関心を引くきっかけとなったかどうかを問う設問である。そうした関心を抱くことで、海外留学などを視野に入れて学習を続けていくモチベーションともなるだろう。

結果は、昨年と同様、「そう思う」「ややそう思う」で、全体の80%を上回っている。未修言語の習得が言語の習得だけでなく、異文化理解への契機になっていることがわかる。実際、それぞれの教員は、写真やDVD教材、音楽などを使用して、外国文化の紹介をうまく授業に取り入れている。

【共通の質問項目】

問1で問われた「シラバスの有用性」については、「そう思う」「ややそう思う」54.7%で、昨年度の52.2%、一昨年度の56.2%とほぼ同様に、50%を上回っている。シラバスのある程度の有用性は実証されている。ただそれがあれだけの労力に見合うものとはいえないのではないかと。「どちらでもない」は昨年の37.8%から33.0%に減少した。シラバスの書き方に工夫が見られたことの反映であろう。ただし「そう思わない」「あまり思わない」は昨年度の10.0%から12.3%に微増している。

問2の授業理解に関する質問に関しては、「そう思う」「ややそう思う」は一昨年度70.6%、昨年度71.6%、今年度70.6%で、これは比較的高い理解度を示していると思う。

問3については、授業以外での学習時間が90分程度以上の割合は11.0%で、これは昨年度の8.9%、一昨年度の10.5%と比べて微増している。週1時間程度以下の割合は依然71.2%（昨年度71.6%、一昨年度70.1%）と高い数値を示している。これは学習指導上の課題である。未修言語を習得するためには、ある程度の時間をかけた、予習や復習、実践が必須だが、この結果は大多数の受講者は授業外ではほとんどその機会を持たないことを示している。「ほぼ0時間」と答えた17.9%（一昨年度19.5%）の学生は、未修外国語を習得する気力がそもそもはじめからないのではないか。彼らの意識を改善することが強く求められる。

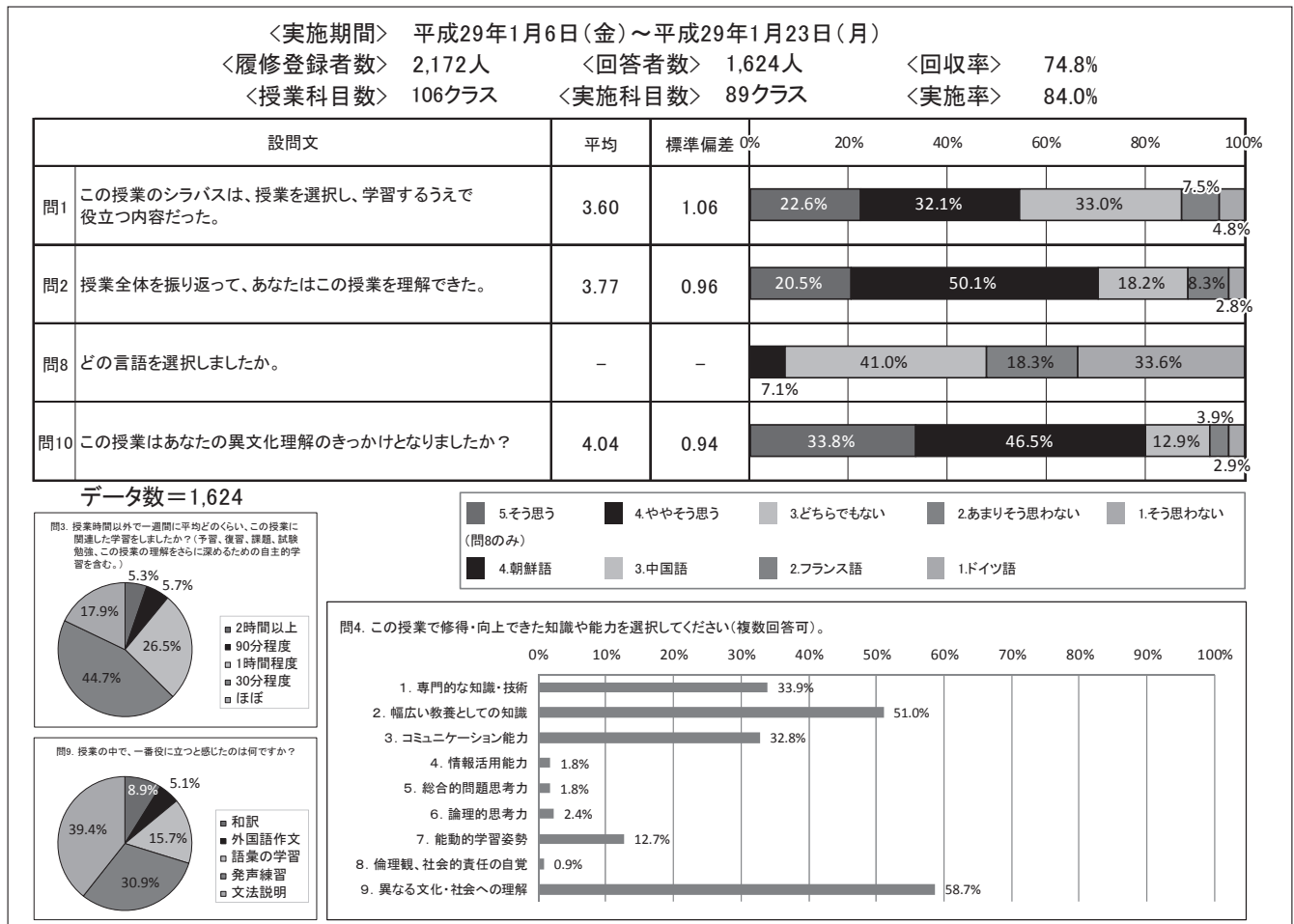
問4での、授業を通して得られた知識・能力として、「専門的な知識・技術」「幅広い教養としての知識」「コミュニケーション能力」「異なる文化・社会への理解」がいずれも、昨年度とほぼ同じ高い数値を示しており、未修言語科目の教育目的はおおむね達成されていると評価できよう。言語の習得には主体性が不可欠であるが、「能動的学習姿勢」は12.7%と低い数値で、改善の余地があり、指導の際の更なる工夫が求められる。

【全体的な傾向と今後の課題】

アンケートの集計結果から得られる概評として、シラバスが授業への有益な手引となり、受講生が外国語の基礎を十分に理解しているという傾向がうかがわれる。それぞれの項目で前年度調査より大きな変動はなく、未修言語学習が安定した成果を上げていると言える。

ドイツ語・フランス語・中国語に関しては、担当教員の多大な尽力もあり、交換留学制度が充実している。1年館の長期留学だけでなく、夏期春期休暇中の短期研修も整備されていることは学習の継続へのモチベーションとなっている。国立台湾師範大学とウィーン大学に加えて、2017年度からはフランスのリヨン・カトリック大学附属語学学校での短期演習も開催されている。いずれの短期研修も、2018年度からは2単位の単位化も可能になる予定である。

今後の課題としては、やはり学習時間の確保が重要だろう。言語の習得はどうしても時間が必要である。新しい言語を学ぶには、授業の予習・復習を通じて、基礎を少しずつ確実なものにするしかない。ルーティーンで宿題を与えるだけでなく、歴史や文化について話したり、あるいはヴィジュアルで見せるなどして、受講生が自ら進んで外国語に触れたいという意欲をもてるように担当教員は常に工夫をする必要があるだろう。



理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて

—その現状、経年変化、今後の課題—

理工学系 FD 委員会委員長
都市教養学部理工学系物理学コース教授
森 弘之

【理系共通基礎科目の目的・目標】

理系共通基礎科目は、数理科学関係、物理学関係、化学関係、生命科学関係、電気電子工学関係、機械工学関係の6分野から、全学部学生を対象に、一般教養の自然科学系の授業として開講されている。理系共通基礎科目として2017年度前期に開講された科目は、微分積分Ⅰ、線形代数Ⅰ、微分積分Ⅲ、線形代数Ⅲ、解析入門Ⅰ、離散数学入門、基礎微分積分Ⅱ、基礎線形代数Ⅰ、教養基礎物理Ⅰ、初等物理Ⅰ、専門基礎物理Ⅰ、物理学概説Ⅰ、物理通論Ⅰ、化学概説Ⅰ、一般化学Ⅰ、一般生物学Ⅰ、生物学概説ⅠA、工学系電磁気学、工学系電気回路、電気数学、材料の力学ⅡB、工業の力学ⅡB、機械の力学ⅡBであり、これらが今回のアンケートの対象となっている。

【理系共通基礎科目独自の質問項目と評価結果】

科目群独自の質問として、受講者数、授業環境、授業テーマに関する以下の3項目を選定し、64の授業科目4,573人の受講者のうち、59科目3,482人から回答がよせられた。

問8 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか。

問9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。

問10 この授業テーマは自分の関心にあった。

回収率は、一昨年度の74.4%、昨年度の74.6%を上回り、76.1%であった。

問8のクラスの人数については、ちょうどよかったという意見が70.8%と最も多く、これは一昨年度の65.4%、昨年度の68.6%を超えて伸びている。やや多かったという意見と多かったという意見が合わせて27.0%となっていたが、これも一昨年度の32.4%、昨年度の28.7%より低下し、クラスの人数については肯定的意見がここ数年増え続けている。また、問9の授業環境については、快適あるいは特に問題がないと感

じた学生が73.4%となり、昨年よりも若干下がった。昨年度までは目立って空調等が改善されてきたが、今年度はその評価が頭打ちになっていると思われる。問10の授業テーマについても、昨年度と比較してわずかに低下した。ここ数年の教員による授業改善の取り組みの効果が昨年度までは現れてきたが、その効果が一定のレベルに達していると考えられる。

【共通の質問項目の評価結果】

共通の質問項目は以下のように設定されている。

問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか。

問4 この授業で修得・向上できた知識や能力を選択して下さい。

問1のシラバスについては、およそ半数の学生が授業の選択や学習に役立ったと答えており、否定的意見は昨年度よりも少なくなった。問2の理解度については、肯定的意見が昨年度よりも増えているものの、2割を超える学生が理解したとはいえないと答えている。この数字は昨年度とほぼ変わらず、継続的な工夫が求められる。問3の学習時間については、昨年度から「ほぼ0時間」と答えた回答が減り、その分「30分程度」の回答が増えた。授業時間以外での学習をほとんど行っていなかった層が、少し学習するようになったようである。問4の修得技能については、専門的な知識や技術、あるいは理論的思考力が多くなっているが、これは理系の授業としての特徴といえる。

【集計結果の経年変化に関する所見】

質問項目が変わった年もあるためすべての項目につい

て経年変化を迫るわけではないが、問1、問2、問9、問10については過去数年分の変化をたどることができる。前期と後期とでは状況も異なるため、前期に絞って年度比較をすると、2017年度はこれらのいずれの質問においても高い平均値を出している（肯定的意見ほど数字が高い）。誤差もあろうが、改善の努力や工夫が少しずつ数字となって現れていると思われる。

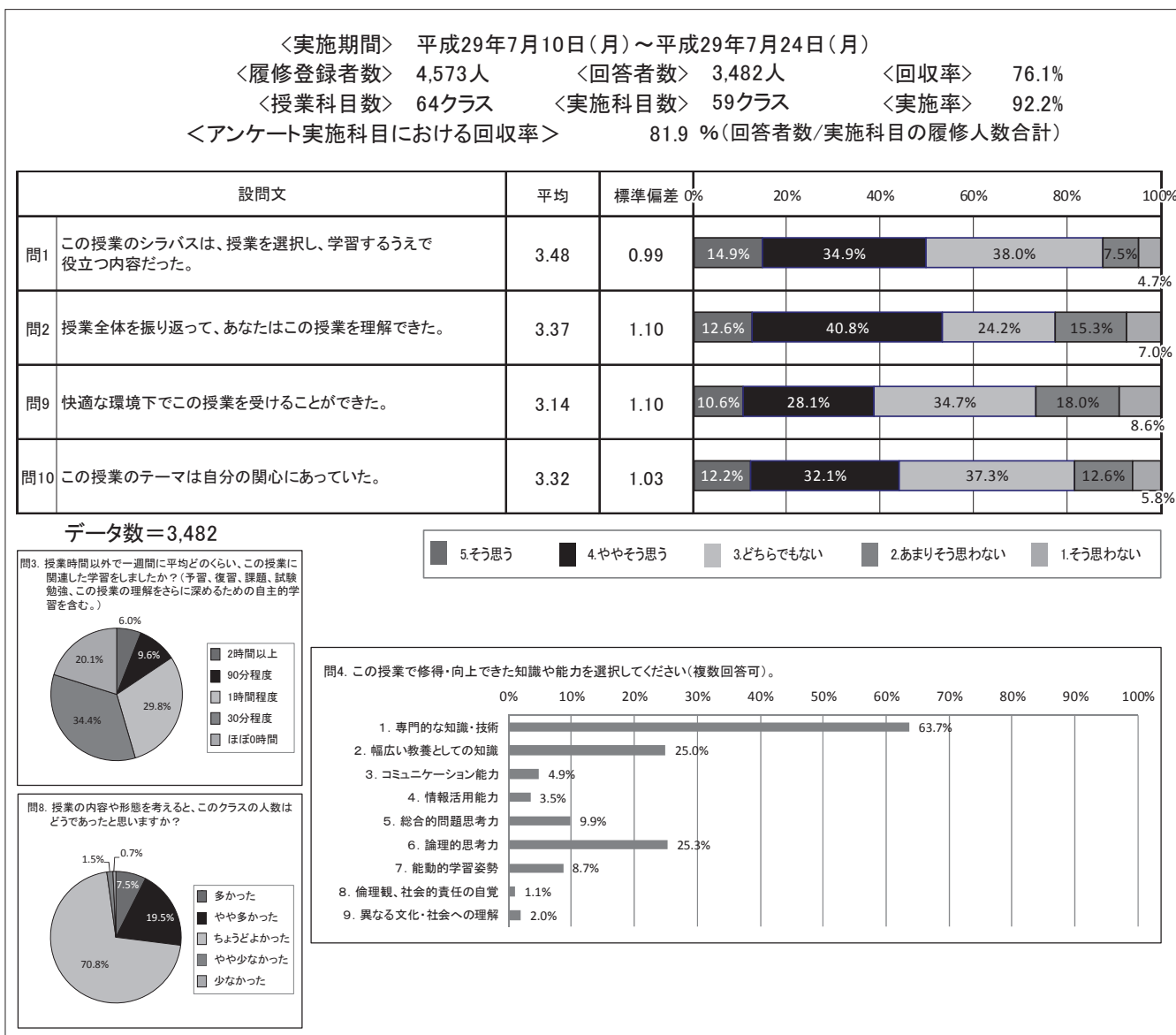
【今後の改善に向けた課題】

経年変化を見る限り、2017年前期も引き続き高い数字を出せたが、わずかな変化に過ぎないとも言える。しかし授業改善に向けた努力を継続していくことにより、この小さな数字が積み重なり、数年かけて改善の成果が目に見える形で出てくるだろう。一方で、アンケート結果の評価点を上げることが目的化しては本末転倒である。評価項目にない点も含め、授業に対する満足度

を上げていくためのFD活動が今後も一層必要になる。

授業環境や設備に関する評価が、他の質問項目の評価に比べて低いのは、まだまだ改善の余地があるということの意味している。特に空調などは自由記述欄に今年度も不満が書かれている。教員にとっても、快適な教室空間は、よりよい授業を提供する上で重要な要素の一つである。冷暖房費との兼ね合いもあり、簡単ではない問題だが、大学側の努力によりこれまで徐々に改善が進んできた。それは、アンケートから抽出される重要な意見を大学側にフィードバックしてきたからであり、このルートを通じた環境改善の努力もさらに進めていく必要がある。

上記で明らかなのは、自由記述の重要性である。教員や大学に直接希望を伝えられる貴重な機会であることから、学生の自由記述欄の積極的な活用を期待したい。



教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

教養・基盤科目群検討部会長
都市教養学部経営学系経営学コース教授
野口 昌良

【はじめに】

首都大学東京の特色ある教養教育科目には、基礎科目群のほかに、教養科目群と基盤科目群が含まれています。教養科目群は、「都市・社会・環境」「文化・芸術・歴史」「生命・人間・健康」「科学・技術・産業」という4つのテーマに分類され、首都大学東京に所属する学生が、これらのテーマから幅広い知識を修得し、理解を深めるとともに、社会人として必要な教養を身につけ、総合的な思考力や問題解決能力を養うことを目的としています。他方、基盤科目群は、「人文科学領域」「社会科学領域」「自然科学領域」「健康科学領域」の4つの領域で構成され、専門知識の修得に不可欠な基礎的・導入的な知識及び能力を修得し、各学部・系での専門分野の学修に備えることを目的としています。また、自らの専門とは異なる分野・領域についての知識を深めることで、複眼的な視野をもつことも企図しています。以下では、教養科目群及び基盤科目群の2017年度前期開講科目（ただしキャリア教育科目を含む）に対して実施した授業改善アンケートの結果について、その概要を説明することにします。

【授業改善アンケート実施状況について】

授業改善アンケートは2017年度前期に開講された95クラス中78クラスで実施され、履修登録者数10,998人中、5,855人から回答を得ており、回収率は53.2%でした。過去3年間のアンケート実施状況（2014年度13,254人中7,049人回答（回収率53.2%）、2015年度11,625人中6,203人回答（回収率53.4%）、2016年度10,947人中6,156人回答（回収率56.2%））と比較すると、2017年度の回答者数は6,000人を割り込み、回収率も低下したといえるでしょう。早急にこの参加率の低下への対策を講ずることが必要となるでしょう。授業改善アンケートは、首都大学東京で提供される教育の質を保証する重要なツールだからです。

【質問項目とその評価結果】

まず共通質問項目である問1で問われた「シラバスの有用性」に対する回答平均は3.74であり、「そう思

う」「ややそう思う」と有用性を認める学生が62.5%に達しています。これは、昨年度の回答平均3.70・有用性回答60.2%を僅かながら上回っています（ただし回答平均の標準偏差0.96）。近年のシラバスの記載内容の充実が奏功しているのかもしれませんが、実際、「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した、シラバスの有用性に対して否定的な学生の割合も10.5%から9.0%と減少しています。教養・基盤科目群は、新生が多く受講する科目群であることから、講義選択のガイドとしてのシラバスの有用性を高めることは非常に重要な施策であると考えます。

次に、問2で問うた「講義内容の理解度」についての質問と、問9で問うた「受講の結果としての知見の広がり」について回答結果を一緒に検討してみたいと思います。問2の回答平均3.62は昨年度の回答平均3.55（2015年度3.53、2014年度3.57）を上回っており（ただし回答平均の標準偏差0.95）、問9の回答平均3.78も、ほんの僅かですが、昨年度の回答平均3.76（2015年度3.75、2014年度3.77）を上回っています（ただし回答平均の標準偏差0.91）。問2の理解度について、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が63.6%を占め、これは昨年度の59.0%（2015年度57.5%、2014年度60.1%）から改善しています。他方で、「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な学生は昨年度の15.9%（2015年15.0%、2014年度15.3%）から13.3%へと減少しています。問9の知見の広がりについても、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が68.6%を占め、これは昨年度の66.4%（2015年66.0%、2014年度67.5%）から改善しています。「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生も昨年度の9.7%（2015年9.0%、2014年度8.8%）から8.2%へと減少しています。総じて、これらの情報は所属学生の学修成果が改善されていることを示唆しているように思われます。

「講義の難易度」について問うた問8についての回答平均は2.60であり、昨年度の2.64（2015・2014年度ともに2.64）より低下しています（回答平均の標準偏差0.75）。「やや難しかった」と「難しかった」と回答した学生の割合は38.0%で、昨年度の35.8%

(2015年 34.8%、2014年度 34.6%)を上回っています。しかし、この難易度については、「ちょうどよかった」と回答している学生が57.4%を占め、この割合は昨年度の57.7% (2015年 59.8%、2014年 59.0%)と変わらないとみなすこともできます。およそ6割の学生が、講義の難易度を適当と考えているわけです。

問2の理解度と問8の難易度に対する回答結果を比較してみると、難易度について「易しかった」「やや易しかった」「ちょうどよかった」と回答した学生の割合が62.0% (昨年度 64.1%、2015年度 65.2%、2014年度 65.4%)であるのに対し、講義の内容を理解できたと回答した学生の割合が63.6%に上り、やはり所属学生の学修過程が改善されていることが伺えます(ちなみに昨年度までは理解度の方が難易度の方を5%以上下回っていました)。「修得できた知識・能力」について問うた問4(複数回答可)については、「幅広い教養としての知識」65.0% (昨年度 63.3%、2015年度 60.9%、2014年度 62.8%)及び「専門的な知識・技術」39.2% (昨年度 45.1%、2015年度 43.1%、2014年度 45.5%)とする回答が支配的であり、幅広い教養と専門知識修得のための基礎という教養・基盤科目群の趣旨に沿った科目が提供されていることを裏付けています。

他方で、所属学生の学修過程に関連しているのが問3の「授業時間外学習時間」に関する問いですが、少し懸念される状況が生じています。「ほぼ0時間」と回答

した学生の割合が51.6%と、依然として半数を超えている(昨年度 53.9%、2015年度 51.9%、2014年度 53.1%)うえ、「1時間程度」以上学修に従事していた学生の割合が昨年度 20.9% (2015年度 19.3%、2014年度 19.2%)から17.7%に低下する一方、「30分程度」と回答した学生の割合が25.2% (2015年度 28.7%、2014年度 27.7%)から30.7%へと増加しています。

受講人数について問うた問10への回答では、67.5%の学生が「ちょうどよかった」と回答しています。これは昨年度の割合である66.6% (2015年度 69.7%、2014年度 57.5%)とほぼ変わらず、やはりおよそ6割以上の学生がクラスサイズを適当と考えていることを示しています。

【今後の課題】

今年度、学生の学修過程が改善したと考えられる回答結果が得られたことは非常に望ましいことであると考えられます。他方で、授業時間外での学習の取り組みが低下したと考えられる回答結果も得られています。他の講義科目での学習時間との比重の変化が影響している面もあると思われますが、授業時間外学習は学生の理解度を向上させるうえで非常に重要なプロセスであり、首都大学東京の指向する学生の能動的な学習へと結びつけるためには、この点についてなんらかの施策を講じる必要があるかとも思います。

